

## 第二章 縄文時代

### 第一節 縄文時代概説

#### 一 自然環境と生活

縄文時代とは、日本列島における土器の出現から、水稻耕作開始までの約一万年の期間を指している。今のところ最古の縄文土器である隆起線文土器は放射性炭素の年代測定によって一万二七〇〇プラスマイナス九七〇年という年代を与えられている。すなわち第四期の最終氷期であるヴュルム氷期 (Würm glaciation 七万年～一万八五〇〇年前) が終わり地球が温暖化していく時期に縄文時代は始まったことになる。氷期の最盛期である二万年前ごろには年平均気温が現在より七～八度低く、発達した氷河の影響で海水面が現在より一二〇～一四〇メートル低かったとされる。その後気温の上昇とともに氷河が後退し、海面が徐々に上昇する。およそ一万二〇〇〇年前には海水位の上昇により瀬戸内海が形成され、各地に溺れ谷が形成されるようになる。縄文時代が始まるころには現在の日本列島とほぼ同じ形になっていたと考えられている。こうした全地球的な温暖化

に伴う環境の変化に対応しつつ縄文文化は発展していくこととなる。日本列島の大半が温帯に属するようになるにつれ季節変動の影響を受けざるを得なくなっていく。

#### 縄文海進

ヴュルム氷期以降、地球的な温暖化により氷河が後退し海へ流れ込み、海面は上昇していく。

この変動については、現在の海面が最も高く、それにむかって上昇をするとするシェパード曲線と、海面の上昇は一律に起きたのではなく五～六〇〇〇年前ごろには現在の海面より一～三メートル高くなった時期があるとするフェアブリッジ曲線の二説がある。この海面の上昇を縄文海進と呼び、現在の沿岸部から離れた場所で貝塚が発見されることから、考古学的にも古くより議論されていた。

ただし、近年の調査の結果では、海進の時期と水位に地域差が認められることがわかってきた。例えば、北海道のクッチャ口湖では五六〇〇年前ごろに現在より三～四メートル高位、大阪湾では約六〇〇〇年前に三メートル高位、九州では糸島低地帯で約三三〇〇年前に最高位となっていたとされる。海進現象は現在の地形・海水準と比較し説明されることから、こうした時間・地域差は地殻変動による地形の変化を反映しているものとして理解されている。

また、こうした海水面の変化は、日本付近を流れる海流の変化とも対応している。海水位の上昇により八〇〇〇年前ごろに

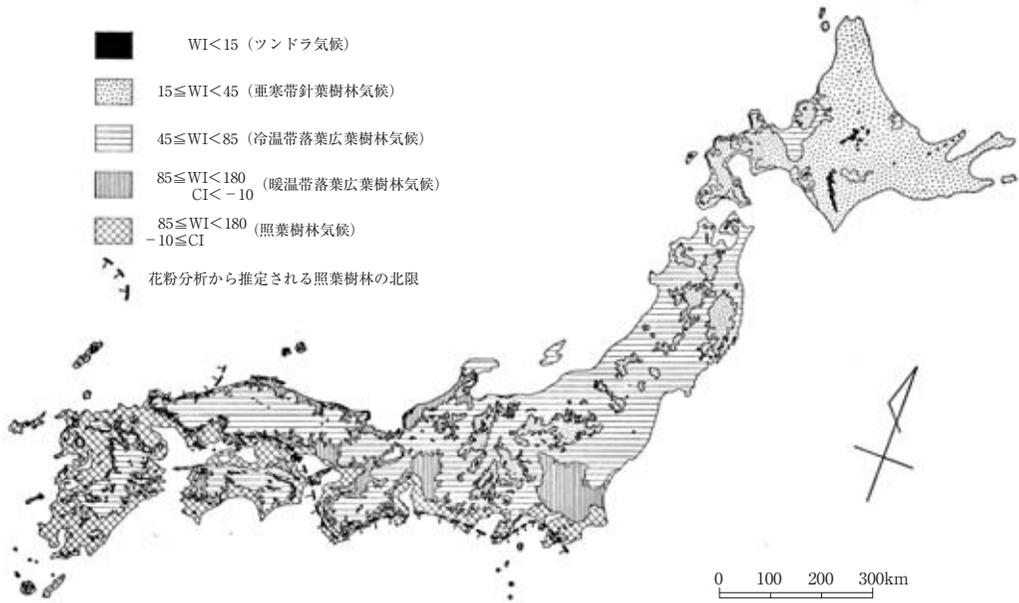


図2-13 最終氷期の地形と植生

は対馬海峡が開口する。それにより黒潮の分流が日本海に流れ込み始めるようになり、海水温は七〜八度上昇する。海水温の上昇により水蒸気の発生量が増えるため日本海側に大雪が降るようになったのはこれ以降である可能性が高いとされる。

### 照葉樹林

寒冷であった二万年前ごろには、東北南部から九州に至る日本列島の大半の植生はナラ類を中心とした冷温帯落葉広葉樹林であり、シイ・カシ類を代表とする照葉樹林は九州・四国の南部に広がるのみであった。森林限界は現在より一五〇〇m以下がっていたとされる。しかし、気温の上昇とともに照葉樹林の範囲は広がっていく。縄文時代の早期には九州沿岸部と西日本の太平洋側沿岸部に分布した照葉樹林が、前期には関東地方の沿岸部まで広がり、晩期には更にその内陸部にまで広がるようになる。クルミ・クリ・トチなどの落葉広葉樹林帯の堅果類に加え、照葉樹林にはシイ・カシ・トチなどの堅果類をもたらす樹木が加わることとなる。植生の変化はそこに生息する動物にも変化をもたらす。つまり、温帯の気候下では季節により人類が獲得できる食糧資源が変化し、必然的に縄文人の生活環境に大きな影響を与えることとなる。

### 火山活動

今でも火山大国である日本列島では、堆積した火山灰層から縄文時代の火山活動が確認されている。九州においては約一万一五〇〇年前には桜島テフラ、六三〇〇年前には鬼界カルデラが、四二一〇〇年前に桜島が噴火

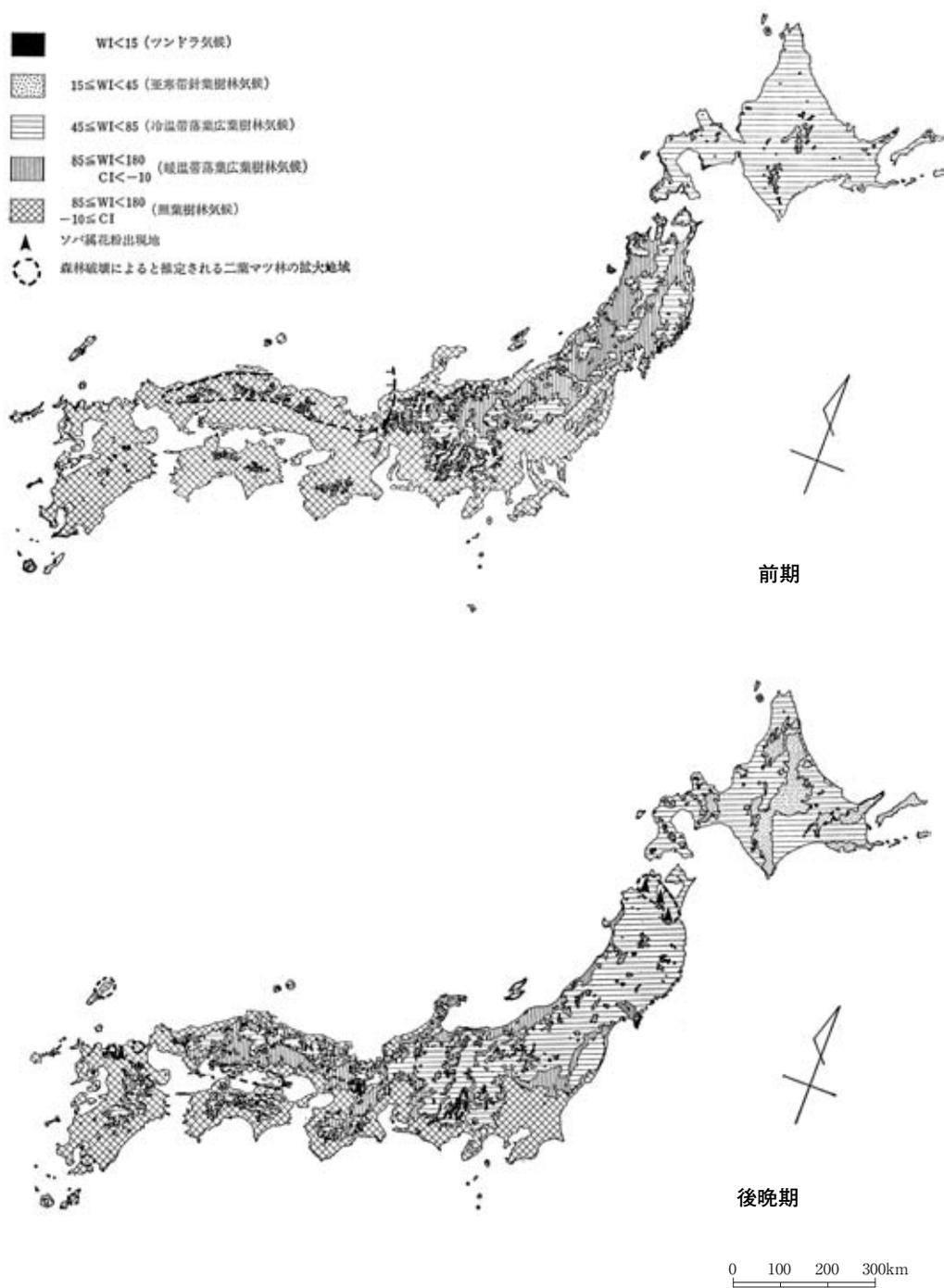


図2—14 縄文時代の植生 (前期・後晩期)

し、周辺に火山灰を降らせている。特に鬼界カルデラから噴出した火山灰や軽石の堆積層はアカホヤと呼ばれ中・四国に至る広い範囲で確認されている。この大噴火による被害は甚大で、九州南半に壊滅的な打撃を与えたものと考えられる。更に、降灰により広い範囲で植生などが変化し、自然環境と密接な関係にあった縄文人の生活にも大きな影響があったものと推定される。こうした被害を示すように、アカホヤより下層の南九州の特色的な土器群はその上層では姿を消し、西北九州を分布の中心とする轟式、曾畑式に取って代わられてしまう。こうした状況から、この層の縄文時代前期の始まる基準とされており、年代決定に重要な役割を果たしている。

そのほかにも小規模ではあるが、九州では中期の初めごろにあたる四八〇〇年前には阿蘇山、後期には池田湖、霧島御池が噴火している。直接の被害はなくとも、噴火による火山灰などが環境へもたらす変化は自然環境への依存度が高い狩猟採集生活には大きな影響を与えたであろう。

### 縄文時代の道具

縄文時代はそれまでの旧石器時代とは土器と鏃やじりの出現で大きく画期される。土器を用いることによって、人類は煮沸調理を行うことができるようになった。このことは、食用可能な動植物が増えるとともに、獲得した食糧の保存加工が可能になったことを意味する。保存食は狩猟採集生活において、生活の安定に重要な役割を果たす。

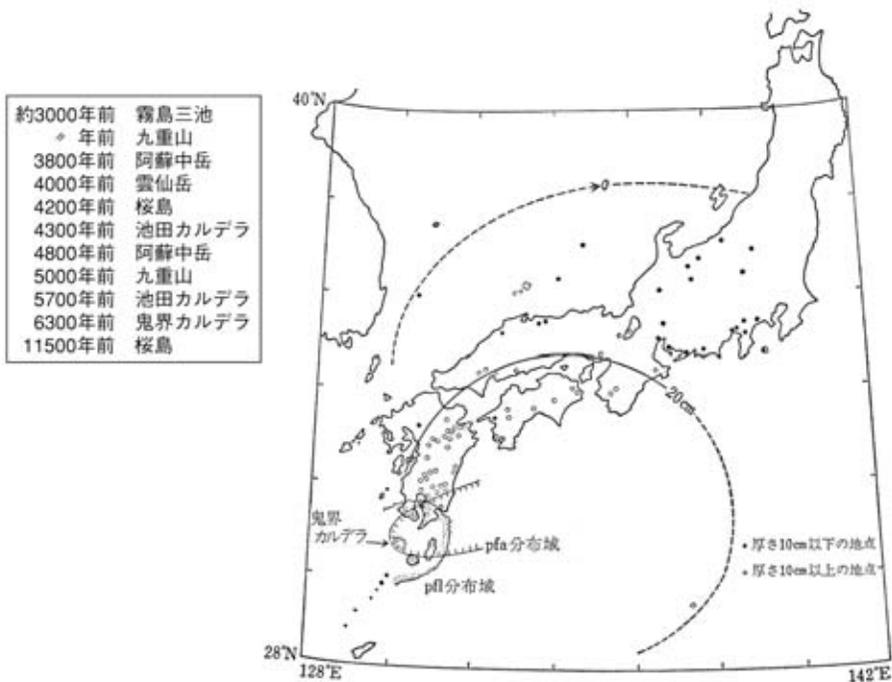


図2—15 アカホヤの分布と縄文時代の主な火山活動

また、離れた場所から狩猟ができる弓矢により、捕獲可能な動物も増えたことであろう。旧石器時代に出現した石槍が衰退していくのに対し石鏃が急激に普及する状況は、当時の環境下で弓矢が有効な道具であったことを示している。

## 石器

九州を除き全国的には草創期から石鏃が現れ、弓矢による狩猟が始まったことを示している。

九州では草創期まで細石器を使用しており、早期になって石鏃が現れる。石鏃は黒曜石・サヌカイト・チャートなどの硬質で鋭利な剥片を生じる石材を用いている。形態は草創期には小型で矢柄に装着する基部を平らに凹ませるものが大半だが、早期には長脚鏃や鋏形鏃などさまざまな形のもが作られるようになる。前期以降東北の北部以北で基部を突出させる有茎鏃が出現し、晩期初頭には畿内に流入する。これに対する弓は、丸木弓で、全長一五〇センチ前後のものが多く確認されている。弓筈

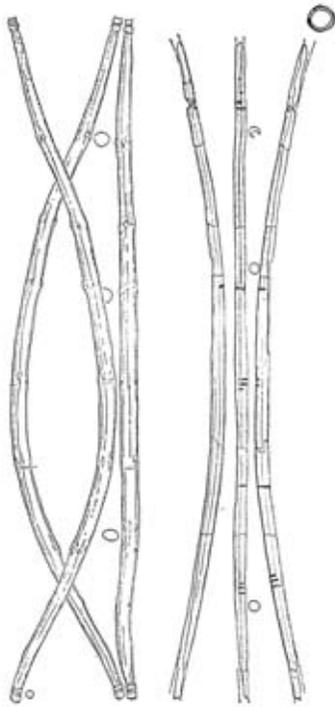


図2—16 縄文時代の弓 (1/20)

は、先端を細く削ったものとコブ状に削りだしたものがある。ナイフ形石器の段階で出現した尖頭器は草創期に盛行するが、基部に茎を作る有舌尖頭器は草創期前半には姿を消す。早期以降になると茎をもたない木葉形の尖頭器は東北日本に偏って分布し、数量も減っていく。尖頭器とされるものが必ずしも石槍として使用されたとは限らないが、石鏃の普及に呼応するように尖頭器が衰退する状況は、狩猟方法の変化を反映したものと考えられている。

旧石器時代の石器に比べ、縄文時代には機能分化が進み器種が増えるとともに製作時の加工の度合が大きくなってくる。旧石器的な規格性のある搔器（スクレイパー）などは草創期の段階でほぼ姿を消してしまい、早期の押型文の段階で多目的な用途に使われたと推定される石匙が現れる。石匙はつまみ状の小突起をもち刃部が作られた石器であり、つまみの位置で縦型と横型に分類される。石鏃も同様に草創期までは前時代と似た鏃部の短いものが作られるが、前期以降につまみ状の頭部をもち鏃部の長いものが増える。

打製石斧も縄文時代に多く出土する石器の一つである。早期のものは自然礫の一部を加工した簡単なものが多いが、次第に全面に調整を施すようになる。前期までは片刃で直線刃の木工・多目的具とみられるものが多いが、中期以降になると両刃で刃部が丸みを帯び横から見ても湾曲するものが増え、こ

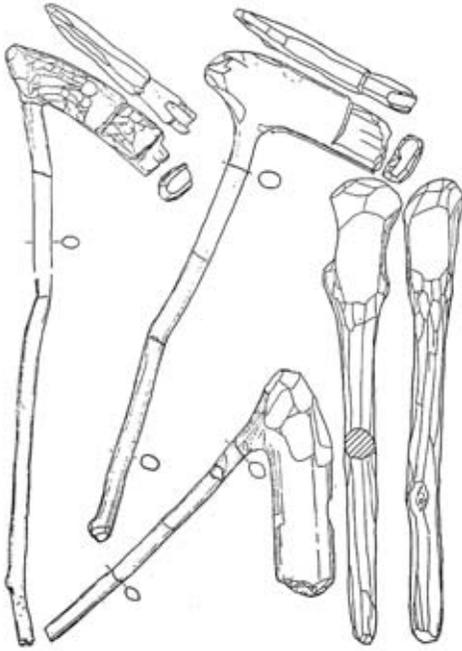


図2-17 石斧の柄 (1/10)

れらは土掘り具とされる。関東・中部地方では中期に爆発的に出土量が増えるが、西日本・九州では遅れて後期になって増加する。

縄文時代になると磨製石器ませいの比重が大きくなってくるが、特に前期中葉からの磨製石斧の普及は打製石斧から木工具としての機能が分化したものとされる。前期には乳棒状、中期末には定角式が定型化する。乳棒状石斧は断面楕円形の棒状で刃部はわずかに丸みを帯びた両刃となる。斧身が厚く直線的で、斧として使用されたものと考えられている。定角式石斧は側縁と頭部が研磨され、石斧の主面との間に稜を作る。こちらは、木工

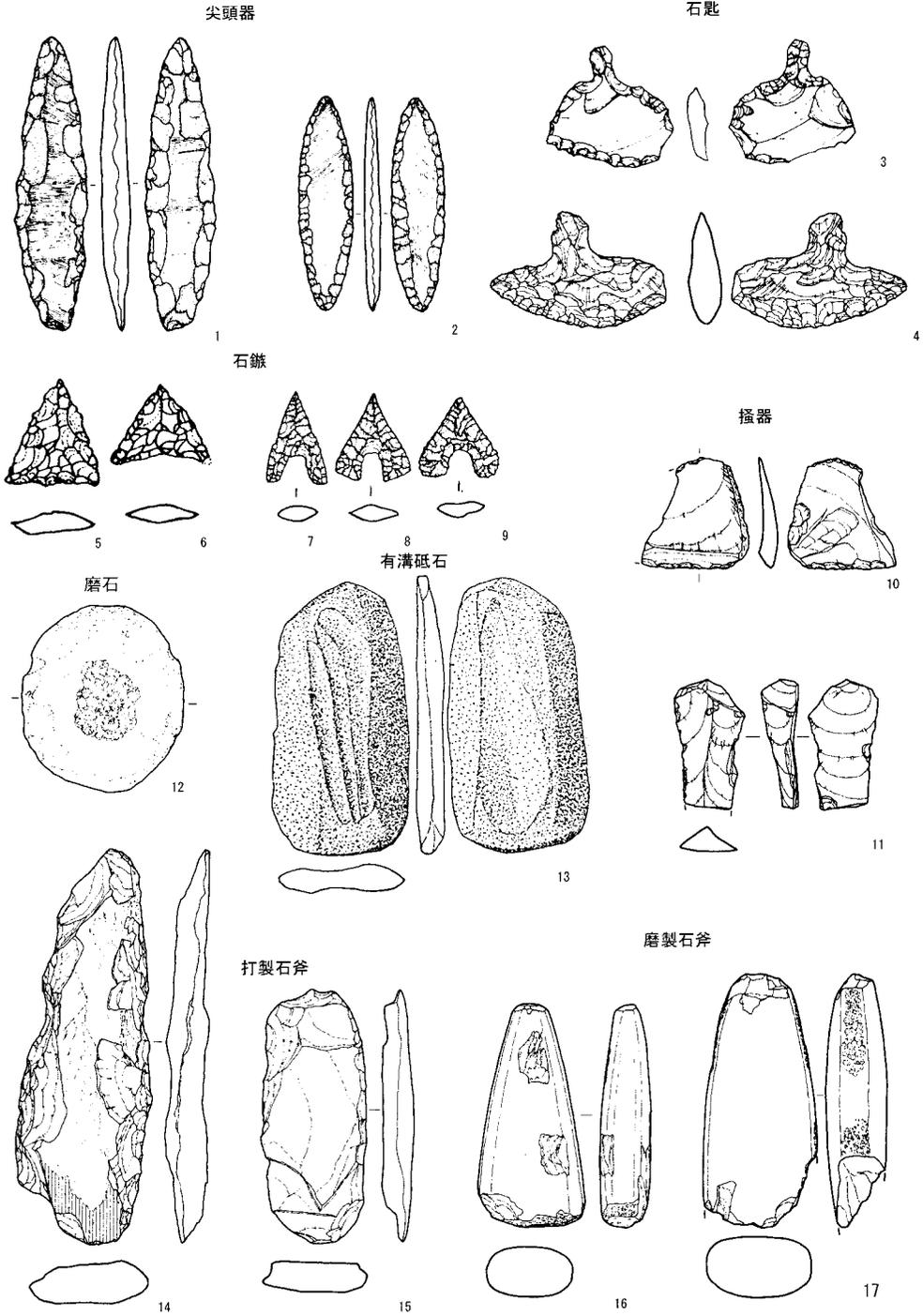
具とされる。こうした木材加工具の分化が進んだ背景には、前期以降に集落が大型化していき、より多くの木材とその加工が必要になったことが考えられる。斧は着柄方法から、刃線が柄とほぼ並行する縦斧と柄とほぼ直交する横斧とに分けられる。基本的に縦斧は伐採用、横斧は加工用と考えられており、鳥浜貝塚では前期に両者の柄が出土している。

磨製石器の普及に現されるように縄文時代には研磨技術が発達する。溝状の研磨痕をもつ有溝砥石が縄文時代をとおして各地で出土する。かつて矢柄研磨機とも推定されたが、溝の断面形や長さ・位置が多種多様であり、特定の対象をもつ道具ではなく、骨角器などさまざまなものを研磨したものであろう。

そのほかにも、早期以降には、堅果類の磨り潰しに使用したと推定される石皿と磨石の出土例が増える。新潟県沖ノ原遺跡で出土した、いわゆる「縄文クッキー」にみられるように、これらの道具を用いて製粉したものをこね合わせて食することが一般的であったと考えられる。

### 骨角器

狩猟採集によって得られたさまざまな獲物は食料としてだけでなく、道具の材料としても使用されている。石器に比べ軟らかいため色々な加工を施すことが可能である。よく知られるのは鹿角製の釣針である。釣針の大きさや形にはさまざまな種類があり、対象となる魚によって作り分けていたと考えられる。釣針は前期になるとほぼ全国で確



- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| 1、2 岩下洞穴(3/5)   | 10、11 石町遺跡(1/2)    |
| 3 鳥浜貝塚(1/2)     | 12 山崎遺跡1号住(1/2)    |
| 4 石町遺跡 P57(1/2) | 13 高井東遺跡(1/3)      |
| 5、6 上黒岩岩陰(1/2)  | 14 石町遺跡2号住(1/3)    |
| 7~9 岩下洞穴(3/5)   | 15~17 石町遺跡6号住(1/3) |

図2—18 縄文時代の代表的な石器

認められるようになり、中期に発達する。西北九州では後期以降は別々に作った部品を組み合わせる特徴的な結合式釣針が分布する。同様に漁労具であるモリ・ヤスの頭部も多く作られる。両者とも獲物に突き刺すための道具であるが、紐を結ぶための突起や穴が開けられたものはモリに分類されている。モリ・ヤスは東日本で著しく発達し、西日本とは漁の対象となる魚類が異なっていたものであろうと考えられる。

### 木製品

低湿地や貝塚遺跡などの特殊な環境下でしか残らない木製品であるが、限られた遺物から優れた木材加工技術を持つていたことが分かる。鳥取県桂見遺跡出土の丸木船は全長七<sup>ノ</sup>、最大幅七〇<sup>ノ</sup>を超え、内側を焦がしながら加工している。また、青森県三内丸山遺跡で検出された直径約一<sup>ノ</sup>の柱を用いた大型建物などの存在も木材加工技術の高さを物語っている。

ケヤキ・トチノキを用いた容器も作られる。器面に漆が塗られることも多い。漆塗りの木製品は鳥浜貝塚で前期の盆状木製品が知られており、漆工技術が古くから発達していたことが分かる。鳥浜貝塚出土の漆塗りの前期の櫛は一

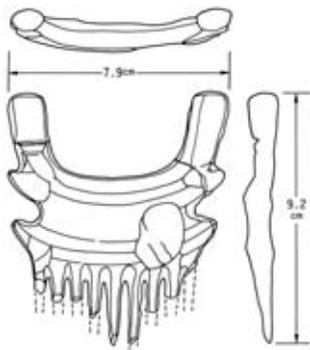


図2-19 漆塗りの櫛

木から削り出している。後・晩期には歯と頭の部分を別々に作り、組みあわせる方法が一般化してくる。こうした木工技術は磨製石斧の発達に伴って進歩している。

### 生業

縄文時代の食料獲得は狩猟・採集・漁撈から成り立っていたと考えられている。前の旧石器時代に比べ、方法は同一であるが、煮沸具である土器の出現により植物のアクぬきなどが可能になり食用の対象は飛躍的に増大したと考えられる。遺跡から出土する食用可能な動植物の遺体を見ると、哺乳類六〇種以上、貝類三五〇種以上、植物五五種以上が確認されることから、縄文人は多種多様なものを食べていたことが分かる。季節によって効率よく獲得できるように狩猟採集の対象を変えながら生活したのであろう。

縄文時代前期になると、全国に貝塚が数多く形成されるようになる。加熱加工が可能になったことにより、それまでは食用に適さなかった貝類が格好の食料・保存食となったことが原因であろう。貝塚からは貝殻とともにさまざまな海洋性動物遺体が見つかっており、クジラに至るまで食用としていたことが分かる。

釣り針・銚などの骨角器、網につけていたと見られる土錘・石錘などの漁労具が出土することが示すように、彼らは積極的に魚類の捕獲を行っていた。また、丸木船は全国で一〇〇例以上確認されており、一般的な存在であったことが分かる。福井

表2—2 貝塚出土の主な動物遺体

|          |           |         |
|----------|-----------|---------|
| (内湾性の貝類) | マシジミ      | アジ亜科    |
| ハマグリ     | ヘナタリ      | サバ属     |
| カキ       | ナミマガシ     | ボラ科     |
| アカニシ     | サザエ       | サヨリ属    |
| サルボウ     | (外洋近くの貝類) | ウナギ     |
| オキシジミ    | ベンケイガイ    | コイ      |
| シオフキ     | ウチムラサキ    | フナ属     |
| ハイガイ     | チョウセンハマグリ | タナゴ属    |
| ツメタガイ    | ダンベイキサゴ   | カタクチイワシ |
| アサリ      | コタマガイ     | ニシン科    |
| オオノガイ    | オニアサリ     | エイ類     |
| カガミガイ    | (淡水性)     | (動物類)   |
| ウミニナ     | カワニナ      | イノシシ    |
| ヤマトシジミ   | タニシ       | ニホンジカ   |
| イボニシ     | イシガイ      | ニホンザル   |
| ツボウミニナ   | セタシジミ     | タヌキ     |
| バイ       | カワシジミ     | アナグマ    |
| イタボガキ    | (魚類)      | クマ      |
| ニホンシジミ   | マグロ       | テン      |
| マテガイ     | カツオ       | カモシカ    |
| アカガイ     | フグ科       | カワウソ    |
| イボキサゴ    | コチ        | ネズミ     |
| スガイ      | マハゼ       | シャチ     |
| シジミ類     | マダイ       |         |
| レイシ      | クロダイ属     |         |
| アワビ      | スズキ属      |         |



図2—20 縄文カレンダー (イラスト・木村政司)

県鳥浜貝塚の前期包含層から出土した丸木船にはフナクイ虫の穴が多く開いており、長期間使用されたことを示している。貝塚から出土する魚類遺体を見るとマグロなどといった外洋性のものがあり、沖に出て漁をしていたことがわかる。

また、ドングリなどの堅果類が出土する貯蔵穴が集落遺跡で確認されることが示すように、縄文人は明らかに食糧を保存することを意識している。当然のこととして季節の変動によって獲得できる食糧の種類・量とも変化する。季節ごとの獲得対象を変えながら保存していくことによって、縄文人は安定した食生活を目指し、結果として安定した社会を築くことが可能となったのであろう。

## 住居

旧石器時代には人々は短期間で頻繁に移動を繰り返し、一か所に長くどまることはなかったと考えられている。そのため簡単な住居しか設営せず、住居跡とみられる遺構はほとんど発見されていない。それに対し、縄文時代になると移動は季節ごとに獲得できる食糧に対応して行うようになる。長期的に使用できる住居を築くようになり、集落を形成するようになっていく。建物の形態としては地面を掘り込み床面とし、支柱を立てて屋根を支える竪穴式住居が出現する。そのほかにも床面を掘り込まない平地式、掘立柱建物が存在したであろう。平地式は構造上、竪穴式と異なり明確な遺構を残さないため、屋外炉などの遺構や遺物の出土状況などが



図2-21 集落モデル

ら判断するしかないが、東日本に比べ住居検出例が少ないのは地形や温暖・多雨といった自然環境から西日本では平地式住居が多かったとする説もある。また、掘立柱建物では中期の富山県桜町遺跡では床を支えるために必要な柄穴・棧穴の開いた部材が出土しており、高床式建物が存在していた可能性がある。また、草創期の隆帯文土器を伴う鹿児島県加世田市の柵原遺跡では舟形に組まれた石組み炉が三基見つかった。の方向性をもつ舟形炉の存在は、住居を築く際の向きなど規範の存在をうかがわせる。早期には竪穴式住居が出現するが、まだ梁・桁を持たない簡単な構造であったと推定されている。この段階までは住居跡は二、三軒単位の小規模で、居住も比較的短期間であったと考えられる。前期になると集落を構成する住居の数が増え、集落の中央に広場を持ち、周囲に住居を配する環状集落が現れる。

中央の広場は共同の空間として機能したと考えられ、墓地を兼ねる場合もある。貯蔵穴は一か所にまとめて作られ、住居は広場を取り囲むように環状や馬蹄形に築かれる。横浜市南堀遺跡では中央の空間に墓地、周囲に竪穴式住居を配している。東日本では、早期の段階から大型住居と呼ばれる通常の数倍〜数十倍の規模の建物が建てられるようになる。こうした建物は竪穴式と平地式のものがあり、その用途は不明だが、集落単位の共同の目的があったと考えられている。大変な労力を費やして築いたのであろう、そうした建物の存在は、集落の構成員が同じ意識を持ち、社会生活を営んでいたことをうかがわせる。

### 精神と文化

早期中葉以降になると、埋葬された人骨が出土するようになる。西日本では大分県二日市洞穴、愛媛県上黒岩岩陰で屈葬された人骨が出土している。前期中葉になると新たに伸展葬が現れる。この時期には屈葬と伸展葬が共存する。どのような理由で両者が使い分けられたかは今のところ不明であるが、葬送に関し明確に観念を持っていたことは明らかである。集落内の空間が役割分化するにしたがつて、中期後葉から集落内に墓域が設けられる例が目立つようになる。後期中葉にかけてその傾向が強まり、伸展葬の割合が増える。後期末以降、東日本を中心に環状列石と呼ばれる遺構が分布する。環状列石の目的について未だ結論が出ているわけではないが、こうした信仰ないし祭祀を行うための施設を築くよ

うになるのも死生観を持ち始めた縄文人の発達した精神性を示しているであろう。

また、土器に施された華美な文様やさまざまな器形から縄文人の発達した精神文化をうかがい知ることができる。実用品である道具にさまざまな装飾を施すことは今の私たちも行っているが、形状から直接機能が推定できない土偶・石棒といった呪具や耳飾・貝輪などの装身具が出土するようになる。土偶は縄文時代早期に出現するが、前期までの段階のものは細部まで造形されない簡素な作りの小型品である。中期になると東日本で発達し、顔や手足がはっきりと表現されたものが現れ、大型の製品が作られるようになる。後期には全国的に広がるが、東日本に比べ西日本では発達が低調である。晩期には東北地方の亀ヶ岡式に伴い遮光器土偶が発達するが、晩期終末には西から土偶は激減していく。男性器を模した石棒は中期から晩期にかけて東日本を中心に広がりを見せる。

装身具として普及しているのは貝製の腕輪である。早期には出現し、全国的に分布している。貝輪の材料は鹹水性のサルボウ・アカガイなどの二枚貝とオオツタノハ・アカニシなどの巻貝が使用されることが多い。材料となる貝の生息域から離れた場所で出土する例も見られ、交易品であった可能性が高い。

## 二 土器の地域性と文化

縄文土器という名称は、エドワード・モースが大森貝塚の報告書の中で「縄により施文した土器」と表現したことが始まりである。しかしモースは貝塚出土土器の名称として縄文土器と呼んでおり、これは今日の縄文時代研究の中でも息づいている。縄文時代には各時代・各地で多種多様な土器が作られている。これらの土器の中には縄文、つまり縄によって文様をつけられていない土器も数多く含まれている。こうした縄文土器の研究は、時期を草創期から晩期までの六期に区分して行われている。この地域でこの六期の土器がすべて出土しているわけではないのであるが、できるだけ近い地域の土器形式を使って各期の土器の変遷について説明してみたい。

### 草創期

最古の土器群である隆起線文土器は、口縁部に粘土紐を張り付け横向きの文様をつける。九州では、起点と終点が同じ環状のものから螺旋状に施文するものに変化する。土器の形は深鉢である。長崎県の泉福寺洞穴10層出土土器を標識とする豆粒文土器は隆起線文土器の最古段階である。粘土粒を張り付けて施文する。

九州ではこの段階の石器は、旧石器時代終末の細石刃が引き続き用いられている。